

サケを食べるクマタカの観察記録

川崎 康弘

099-3452 北海道斜里郡小清水町浜小清水72-25, 日本野鳥の会オホーツク支部

Observation Record of Feeding on Chum salmon *Oncorhynchus keta* by Mountain Hawk-eagle *Nisaetus nipalensis*

KAWASAKI Yasuhiro

Okhotsk chapter of Wild Bird Society of Japan, 72-25 hamakoshimizu, Koshimizu, Hokkaido 099-3452, Japan
✉wryneck123@gmail.com

We observed mountain hawk-eagle *Nisaetus nipalensis* feeding Chum salmon *Oncorhynchus keta* at Lake Abashiri-ko, eastern Hokkaido in 2013. In Hokkaido, it seem to be not rare event that young mountain hawk-eagle uses fish as a food resource. And even adult mountain hawk-eagle may sometimes feed on fish in food-poor area.

はじめに

クマタカ *Nisaetus nipalensis* は、アッサム地方からタイ北部にかけてのヒマラヤ山脈、海南島を含む中国南部および台湾、北は日本まで繁殖分布するタカ類である。日本には固有亜種クマタカ *N. n. orientalis* が北海道から九州にいたる地域の森林に生息する（日本鳥学会2012；森岡ら1998；山崎2013）。

クマタカの食物に関しては、本州ではニホンノウサギ *Lepus brachyurus*、ニホンリス *Sciurus lis* といった中・小型の哺乳類や、ホオジロ *Emberiza cioides*、カケス *Garrulus glandarius*、ヤマドリ *Syrnaticus soemmerringii* などの鳥類、ヘビ類などの爬虫類といった、森林に生息する様々な中小動物を捕食するとされ（宮崎1975；森本・飯田1992；クマタカ生態研究グループ2000；葉山ら2014など）、時には10 kgに近いニホンザル *Macaca fuscata* を捕食した例もある（Iida 1999）。

北海道においても基本的な食物の構成は本州とほぼ同等であるが、特筆すべきものとして、人為的に放置されたエゾシカ *Cervus nippon yesoensis* の死体や、日本国内では北海道にしか分布しないエゾライチョウ *Tetrastes bonasia* の捕食例も報告されている（坪川2004）。また、アオサギ *Ardea cinerea* や、オオセグロ

カモメ *Larus schistisagus* といった、比較的大型の水鳥の捕食例もある（藤巻1999）。

このように、クマタカの食物についての報告は多くあるが、いずれにおいても哺乳類や鳥類、爬虫類などであり、魚類を食した事例については、長谷（2014）による「サケに依存するクマタカが存在する」とした簡単な報告のみであり、詳細については不明である。

筆者は北海道東部の網走湖において、サケの死骸を食べるクマタカを観察したため、詳細についてここに報告する。

観察地の概況

観察地は網走市呼人に位置する網走湖の湖口付近の東岸である（図1）。南北に細長く湖岸の1.6 haほどがキャンプ場として芝生や遊歩道などが整備されており（図2）、湖岸にはハンノキ *Alnus japonica*、ヤチダモ *Fraxinus manshurica*、オノエナギ *Salix udensis* などが、東の斜面にはミズナラ *Quercus crispula*、ハルニレ *Ulmus davidiana* var. *japonica*、エゾイタヤ *Acer pictum* subsp. *mono* などの大径木が多い。湖岸と斜面との間のわずかな平地を縫うようにして、国道とJR石北線の線路が平行して延び、線路脇には鉄道林とし

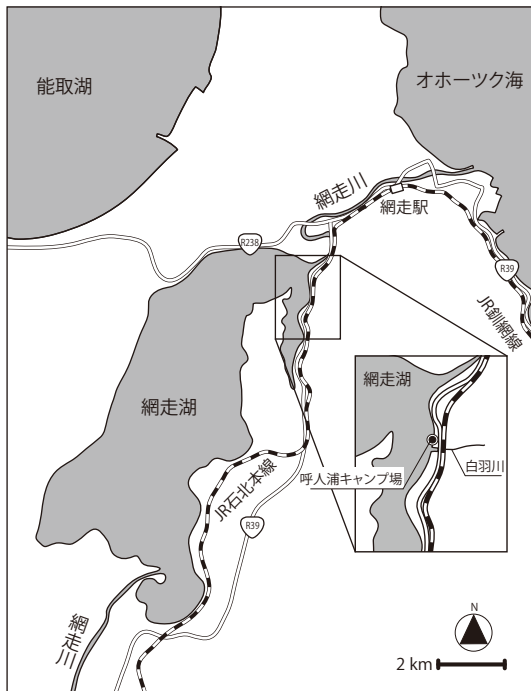


図1. 観察地.

て帯状に植えられたヨーロッパトウヒ *Picea abies* も見られる。

キャンプ場内の一角には白羽川が流れ込んでいる(図3)。この川の上流にはサケ・マス孵化場があり、キャンプ場内の流れ込みでは毎年サケの稚魚が放流されている。このため秋から冬にかけては産卵のために戻ってきた多数の成魚が集まるが、流れ込みの部分に格子があるため湖より上流へは遡上することができず、多くは産卵できずに滞留し(図4)、後に衰弱死する。そうしたサケを狙ってオジロワシ *Haliaeetus albicilla* やオオワシ *H. pelagicus* が滞在し、弱ったり死んだりしたサケをしばしば陸へ引き上げ(図5)、捕食している。

観察方法

観察にあたっては、10倍の双眼鏡と20–60倍の望遠鏡を使用した。撮影にあたっては、望遠鏡に小型のデジタルカメラを装着するコリメート法や、300 mm レンズ付きの一眼レフデジタルカメラを使用した。なお、個体への観察圧を軽減するために常に車両内から観察するようにし、状況に応じて窓枠にメッシュの



図2. 網走湖呼人浦キャンプ場.



図3. キャンプ場の一角に流れ込んでいる白羽川.

ブラインドを張るなどの対応を行った。

観察結果

2013年11月29日08:37、キャンプ場の対岸にあたる呼人半島先端部のハンノキにとまり、湖面を注視しているクマタカを発見した。全体に淡色で、2–3歳程度の若鳥と推定された。視線の先にはマガモ *Anas platyrhynchos*、キンクロハジロ *Aythya fuligula*、ミコアイサ *Mergus albellus*、カワアイサ *M. merganser* などのカモ類があり、これらを狙っていたと考えられる。

09:00まで同じ位置にとまっていたが、一時観察を中断し、10:00に再開した際には姿を消していた。

10:18、キャンプ場内の国道脇に立ち並ぶハンノキにとまっているところが再確認された。ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* と、ハシボソガラス *C. corone* が数十羽周囲に集まって騒いでおり、時々それに反応す



図4. 遡上できずに滞留するサケ。

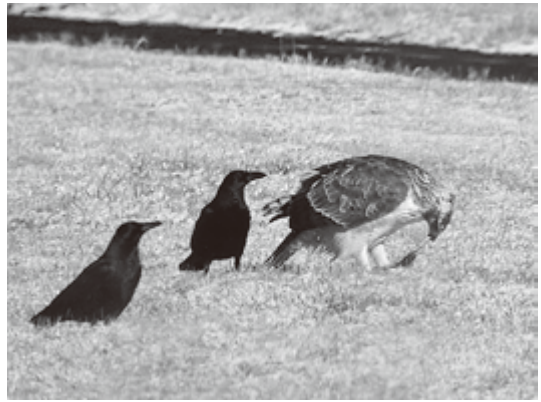


図6. サケの死骸を食べるクマタカ, 2013年11月29日撮影。



図5. オジロワシやオオワシによって地上に引き上げられたと思われるサケの死骸。



図7. 翼を広げてサケの死骸を覆い隠し、上空を通過するオジロワシやオオワシをやり過ごすクマタカ。

るように「ピーユ、ピーユ」と聴こえる小さな声で鳴いていた。その後、飛び立ってキャンプ場内の芝生に降り、そこにあったサケの死骸の一部を食べ始めた(図6)。嘴で小さくちぎり取るようにして食べ、オオワシやオジロワシのように比較的大きな塊ごと飲み込むことはなかった。時々、上空をオジロワシやオオワシが飛ぶことがあったが、その際には翼と尾を広げて食べていたサケを覆い隠してやり過ごしていた(図7)。30分ほど食べ続け、サケの死骸はほとんど尾鰭と皮だけになっていたが、観光客の接近を察知し、それを足で掴んで飛び立ち(図8)、いったん国道沿いのハンノキにとまったあと、すぐに飛び立って国道とJRの線路上を横断し、東側の斜面林へと向かい、姿が見えなくなった。

翌30日の08:00頃にもサケの死骸を食べている様子が観察された。ほどなくして東の斜面林内へ移動し

て姿が見えなくなったが、その後、しばしば周辺の林内でカラス類にモビングされているところが見られた。15:00頃には再びキャンプ場へ飛来し、サケの死骸を食べていた。

約3週間後の12月21日に再訪したところ、やはりサケの死骸を食べるクマタカの若鳥が観察された(図9)。この個体は雨覆の各羽の模様や尾羽の換羽状況から同一の個体と判断された。その後、12月25日および26日にも確認されたが、交通量の多い国道のすぐ脇や、停車中の自動車からわずか10mほどの距離でサケを食べるなど、周辺の環境に慣れてきている様子が見られた。ただし、人間に対しては警戒を怠らず、サケの遡上を観察するために接近する者がいると、いち早く飛び立って東の林内へ姿を消し、その後数時間は出てこないことが多かった。

そのほか、12月24日(坪川正己私信)と30日(船



図8. サケの死骸の一部を持って飛び去るクマタカ。



図9. 初認から約3週間後に確認された同一個体と考えられるクマタカ, 2013年12月21日撮影。

戸春樹私信)にも現地でも観察された。31日以降は現地で観察を行わず、2014年1月3日に再訪したが観察されなかった。この時は前日までにややまとまった降雪があり、それまで芝生の上などに散らばっていたサケの死骸が雪で覆われ、完全に見えなくなっていた。キタキツネ *Vulpes vulpes schrencki* や、カラス類 *Corvus* sp. が雪の下からサケを掘り出して食した痕跡はあったが、クマタカの痕跡は確認できなかった。その後、本種を観察した情報はなく、2013年12月30日が終認となった。

考察

今回の観察では、クマタカは地上に散在した状態のサケの死骸のみを食べていた。このため、自分では生きていたサケを捕ったり、水中の死骸を掴んで陸上へ引き上げるようなことはせず、もっぱらオジロワシや

オオワシが捕り、食べ残したあとの残滓を食べているものと考えられた。

北海道ではサケが集中する遡上河川において、秋から冬の越冬期にオジロワシやオオワシに混じってクマタカの姿がしばしば観察される。このような個体は、本報告の個体と同様に、時にはサケの死骸を食べることもあると思われる。長谷(2014)がサケに依存して越冬するクマタカがいると報告しているように、特に狩りの技術が未発達な若鳥や、成鳥であっても餌資源の少ない状況では、飢えをしのぐため、本来の主食ではないサケの死骸に依存することがあると考えられる。また、十勝川の千代田新水路付近では時折サケを食べるクマタカが確認されており(城石一徹私信)、地域あるいは流域によってはまれな事例ではない可能性もある。北海道のクマタカの餌資源におけるサケの存在については、これまで注目されていなかったが、事例を収集したうえで再評価を行う必要があると思われる。

謝辞

北海道猛禽類研究会の工藤晃央氏ならびに一北民郎氏、(株)地域環境計画の松岡和樹氏、道央鳥類研究会の先崎啓究氏には情報や文献の収集でご協力頂いた。クマタカの生態に詳しい坪川正己氏には様々な情報の提供と現地での状況確認にご協力頂いた。日本野鳥の会オホーツク支部の船戸春樹氏には現地での観察情報を、同支部の城石一徹氏には十勝川の事例に関する情報をご教示頂いた。知床博物館の内田暁友氏には本稿の内容について有益なコメントを頂いた。これらの方々に深く感謝申し上げる。

引用文献

- 藤巻裕蔵(編). 1999. 北海道のクマタカとオオタカ. 26 pp. 北海道猛禽類研究会, 帯広.
- 長谷智恵子. 2014. サケが消えた川にクマタカは戻ってこない: 北海道の大型猛禽類の受難. *Birder* 28: 30.
- 葉山雅広・由井正敏・今井正. 2014. 変動するブナの結実状況の下でクマタカの繁殖に影響する要因. *日本鳥学会誌* 63: 297-310.
- Iida T. 1999. Predation of Japanese Macaque *Macaca*

- fuscata* by Mountain Hawk Eagle *Spizaetus nipalensis*. Jpn. J. Ornithol. 47: 125–127.
- クマタカ生態研究グループ. 2000. クマタカ: その保護管理の考え方. 62 pp. クマタカ生態研究グループ, 野洲.
- 宮崎学. 1975. クマタカ: 常食は生き餌ばかり. 羽田健三 (監), 野鳥の生活. pp. 108–112. 築地書館, 東京.
- 森本栄・飯田知彦. 1992. クマタカ *Spizaetus nipalensis* の生態と保護について. Strix 11: 59–90.
- 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1998. 図鑑日本のワシタカ類 (第2版). 632 pp. 文一総合出版, 東京.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録 (第7版). 438 pp. 日本鳥学会, 三田.
- 坪川正己. 2004. 北海道東部におけるクマタカ繁殖記録. Strix 22: 59–69.
- 山崎亨. 2013. イヌワシとクマタカの分布と生息場所利用. 樋口広芳 (編), 日本のタカ学: 生態と保全. pp. 15–26. 東京大学出版会, 東京.

川崎康弘: サケを食べるクマタカの観察

日本の北海道東部の網走湖でクマタカ *Nisaetus nipalensis* がサケ *Oncorhynchus keta* を食べているのを2013年に観察した。北海道ではクマタカの若鳥が、また餌資源の少ない地域では成鳥も魚を食べるのは稀でない可能性がある。